



# さい帯血バンク NOW

## 第53号

2010年5月15日発行  
日本さい帯血バンクネットワーク  
発行者：中林正雄（会長）  
〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社東館6階  
TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417 <http://www.j-cord.gr.jp/>

## 宮城さい帯血バンクが経営危機に 望まれる赤字体質からの根本的脱却

3月24日、毎日新聞朝刊が「さい帯血バンク 宮城のNPO法人が経営危機」と報じました。宮城さい帯血バンクは日本さい帯血バンクネットワークに参加する全国に11あるさい帯血バンクの一つですが、この経営危機の背景には、単一のさい帯血バンクが抱える問題ではなく、さい帯血バンク全体に共通する根本的な財政問題が経営危機として顕在化したものです。

宮城さい帯血バンクでは3月23日に  
行われた臨時総会で、年間1000万円の赤字が続いていることが報告され、このまま事業を継続することの是非が論

議されました。そして、今年度の運営の  
目途は立ったとして、6月の通常総会および9月か10月の臨時総会で事業をどのような形で継続できるのかを含めた最終的な結論を出すことが確認されました。

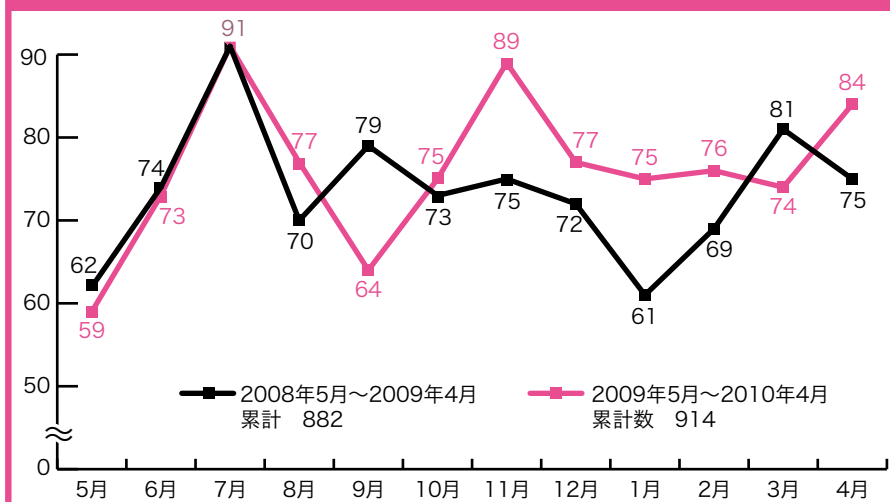
さい帯血バンク事業の収入は、国の補助金  
が大部分を占めています。補助金はさい帯血の採取保存数と公開数に応じて決まります。さらに、さい帯血移植が行われたときに医療保険の診療報酬から、さい帯血管理料としての1件あたり17万4000円がさい帯血バンクに支払われます。しかし、これだけではさい帯血バンクを運営することは

できません。

こうした状況は、宮城さい帯血バンク  
だけでなく、そのほかのさい帯血バンクも同様の状況で、日本さい帯血バンクネットワークが一昨年に行った第三者評価にも明記されていることです。しかしながら、何とかここまで事業を行ってきたのは、各さい帯血バンクの経営母体である血液センターや大学病院が赤字を補填して何とか運営しているのが実情です。そういったバックボーンを持たないNPO法人などでの経営は寄付金などに依存しなくてはならず、苦しいのが現状です。

移植に使うさい帯血は現在は無料で提供され、患者負担金はありません。しかし、このままでは経営は成り立たず、社会的批判の多い骨髄バンクのように患者負担金などが発生するおそれがあります。今春の診療報酬改定で骨髄バンク関連の点数は大幅に引き上げられましたが、さい帯血バンク関連は据え置かれました。こうした経営状況を改善するには、国民のための事業として、国庫補助金の見直しなど、根本的な経営の体制などを改革する時期を迎えているということができそうです。

非血縁間さい帯血移植状況 (2010年5月11日現在の速報値)  
移植数 (累計) **6248** 公開数 **32888**





# 10年目で移植提供数905件

## 順調に伸張するさい帯血移植

平成21年度（2009年4月～2010年3月）にさい帯血バンクから提供され、移植に使用したさい帯血の数は905で、初めて900件を突破しました。このうち9例は複数さい帯血移植で、移植数では896例ということになりました。

日本さい帯血バンクネットワークは昨年10周年を迎えましたが、この間に順調に移植数は伸びてきました。これからもさい帯血バンクは品質の高いさい帯血を確実に供給できるよう努力を続けていきます。

●過去5年間のさい帯血移植数

平成17年度	658例
平成18年度	734例
平成19年度	762例
平成20年度	863例
平成21年度	896例

## 全国大会、今年は神戸で9月18日に

日本さい帯血バンクネットワークの年次報告会を兼ねたさい帯血バンクの全国大会「2010年神戸発、さい帯血バンク推進全国大会」を右記の通り開催します。全国のさい帯血バンク関係者が神戸に集まります。どなたでも参加できます。ぜひ神戸にお集まりください。なお、開催内容等の詳細につきましては、次号本誌にてご案内します。

日時：2010年9月18日（土）

午後2時から

会場：神戸ポートピアホテル

〒650-0046 神戸市中央区港島

中町6丁目10-1

TEL：078-302-1123

### ■善意のお気持ちに感謝します■

兵庫県 フェリシモ基金様

604,890円

兵庫県 井手 俊彦様

300,000円

東京都 毎日新聞東京社会事業団様

300,000円

東京都 行廣 昌彦様

50,000円

行廣 亜紀様

バンナイヒデトシ様

30,000円

東京都 江藤 栄様

10,000円

岩手県 遠藤 律枝様

4,000円

埼玉県 大寺 信行様

3,000円

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

00180-9-57390

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

支店番号：019

預金種目：当座

口座番号：0057390

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク

## 日本さい帯血バンクネットワーク 役員新体制

3月27日、日本さい帯血バンクネットワークは通常総会を開催しました。今春は役員と委員の任期満了により、全役員委員の改選が行われましたが、多くは前任者が再選されました。なお、日本さい帯血バンクネットワークの役員と委員は会則により、連続して2期（任期は1期2年）までの再選制限規定があります。新役員は右表の通りです。

会長	中林正雄（再任）
副会長	加藤俊一（再任）
副会長	原 宏（再任）
副会長	陽田秀夫（再任）
監事	野村正満（再任）
監事	横山莊司（新任）



すこやかに、幸せに。

明日への夢、描きたい。

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。



ニプロ株式会社  
大阪市北区本庄西3丁目9番3号



# 2年間の連載を終えて、田結庄さんの再出発 医師として元患者としての 患者支援外来スタート

本誌「さい帯血バンクNOW」に2年間、12回にわたって連載した「私とさい帯血移植、医師として患者として」は大きな反響が読者から寄せられましたが、前号で連載は終了しました。この体験記を執筆された田結庄彩知（たいのしょうさち）さんは今春、大学院も終了し、今まさに医師として再出発の時を迎えました。連載を終えた田結庄さんをお訪ねして、執筆時の思い出や近況をお聞きしました。

## 連載開始時の思い出

「2年間が終わりました。書き続けることができ、本当にうれしかった。あのときと今とは体調は全然違いましたから」

連載を終えての最初の感想はその一言でした。あれは2年あまり前のこと、田結庄さんに編集部が連載のお願いを最初にした頃は、2度目のさい帯血移植を終えて、まだ半年ほどしか経過していない時期でした。まだまだ横になっている時間が多くて、本当に2年間も書き続けることができるかどうか体力的にも不安を抱えての連載スタートでした。

その田結庄さんは今年4月から、かつて医師として働き、患者としてさい帯血移植を受けた虎の門病院に仕事で復帰することになりました。

## 移植患者の 日常生活相談

「移植の厳しさを体験して、患者さんに移植の選択肢を迫ることはできるだろうか。移植医として現場に戻ることができない、不安だから」というのが率直な思いだったそうです。そんな田結庄さんに血液内科の谷口修一部長が依頼した仕事は「造血幹細胞移植支援外来」です。対象は虎の門病院で移植を終えて退院した患者さんの日常生活一般を含めた様々な部分での支援です。退院患者さんはその後の医療は外来で診察を受けることとなりますが、医療以外の生活の質に関しては、どうしたらよいかわからないことをたくさん抱えています。

## 元患者による 患者支援外来

「医学的なことは理解できても、自分自身で何をどのようにして生活しているのか、さっぱりわからず、誰も教えてくれませんでした。そんな患者として私の体験を生かせると思います」

虎の門病院ではこれまで、移植患者さんの生活支援

には移植コーディネーターの成田円さんが退院時に行ってききましたが、これからは患者支援外来でも相談にのれる体制を今年4月から毎週木曜日にスタートしました。その担当が田結庄さんと成田さんを中心に、必要に応じて薬剤師、栄養士、理学療法士などが同席することになっているそうです。1人の患者さんに対する外来の所要時間は約30分間とみています。

## 移植病院での仕事復帰

「入院当時の病棟看護師長さんに久しぶりにお会いしたら、白衣姿の私をみて泣かれてしまいました」

元気に職場復帰された様子を見て感慨無量だったようです。谷口部長は「身内の診療は平常心を維持できないんです。時に死の可能性も説明しなければならぬ医師も身内だと……」と語ります。田結庄さんの1年先輩で移植担当医だった加登大介医師は「いやではなかったけど、仲間なのでプレッシャーはありました。予期せぬこともたくさんありましたから」と当時を振り返ります。

かつての職場が闘病の場となり、医師から患者へという180度の方向転換、それが再び同じ場所へ復帰し、今度は自分と同じ立場の患者さんのために再出発となりました。まさに「医師として患者として」田結庄さんの新たな舞台に挑むことになりました。



患者支援外来をする田結庄さん（右）と成田さん



## 移植病院 訪問

### ⑦成田赤十字病院

# 目標は「退院時は歩いて帰る」

## 患者さんたちのラジオ体操

「手を前から上げて背伸びのうんどうーっ！」

懐かしい音楽が流れ始めると、今までソファで談笑していた人たちは立ち上がり、それぞれ手足を伸ばしてラジオ体操を始めました。

ここは千葉県内でも屈指の、というより全国でも上位に入るさい帯血移植数（2009年は10例、今年4月末までに9例）を誇る成田赤十字病院の無菌エリアにある共有スペースです。そして体操をしているのは造血幹細胞移植を受けた患者さんたちです。毎日午後3時半からこの体操が始まります。患者さんたちはこの時間になると病室から集まってきます。

## 48床に入院患者58人？

郊外のニュータウン、まわりには高い建物がないところに8階建てが目立ちます。駐車場棟の屋上にヘリポートまで備えたこの病院は、千葉県東部の地区基幹病院として10年前に建て替えられました。エントランスにそびえるクスノキのシンボルツリーに迎えられ、48床のベッド数を有する血液腫瘍科はその中の7階にあります。完全な個室



エアロバイクとスカイウォーカーも



一緒に体操

となった無菌室4室を含め、6床の無菌室があります。しかし周辺に血液の専門の病院が少ないためか、4月26日現在では58人の患者さんが入院されているとのことでした。

## 退院までの目標設定

冒頭の体操は、この病院で独自に行っているクリニカルパスに基づくものです。造血幹細胞移植領域では移植後のリハビリが常識になってきています。しかしこの病院の特徴はリハビリをパスを使って効果を上げようとしていることです。これは、移植を受けた患者さんが退院時には歩いて帰ることを目標にし、そのために「今日できることをやろう」の精神で、目標に向かって取り組むプロジェクトです。移植後のリハビリを始める前に、90日間（それ以上にわたる場合は退院までの）の目標を設定し、それに向かって患者さんが取り組むプログラムです。ここではそれをサポートするのが理学療法士ではなく、看護師さんが行っているのが特徴です。ですから365日実施されているわけです。

体操をしている患者さんたちのそばでは、エアロバイクを漕げるほどに回復された方までいました。



## 高齢者さい帯血移植のために

この病院で行われている造血幹細胞移植のほとんどがさい帯血移植、それも地域性のためか高齢者が多く、ミニ移植が行われています。このプログラムは、高齢の患者さんが寝たきりにならないようにと始まりました。患者さんとスタッフが話し合い、その週の目標を設定し、それとその達成度をリハビリテーションパスにスタッフが記入します。患者さんの希望があればリハビリ日記をつけることもあります。また、移植直後で無菌室のベッドから起き上がれない患者さんにもこのプログラムが適用されます。そういった患者さんのために、無菌室のベッドの壁には、横になっても取り組める運動が写真と解説付きで貼られていました。

## 病棟のベッドが足りなくて

最近ではさい帯血バンクで移植さい帯血がすぐ見つかり、毎週のようにさい帯血移植が行われ、累計で100例を突破したと、応対していただいた青墳（あおつか）信之先生の話です。そうすると無菌室、病棟のベッドが足りなくなって、あちこちに患者さんが散らばるといったことになると池田由佳看護師長さんはいいます。訪問したときもこの状態でした。

まわりに高い建物がないため、病室からだけでなく、無菌室からも成田山新勝寺や成田空港を発着する飛行機が見え、緑豊かな周辺の季節の移ろいとともに、入院されている患者さんの慰めになるものと思われました。